重修真書太閤記

八編　五

へ13
459
75

特 へ 13 門
号 459
巻 75

重修真書太閤記八編巻之十三

柴田瀧川内談を定むる事
并不破原前田金森上京の事

天正十年の秋も過冬もはやなかばにありけるに羽柴筑前守ハ主君の御葬式万事とゝのひ京都の所置御所々の御用残る所なく勤め半時の暇もなく明し暮しありける北畠信雄尾州清洲ふ住して百万石神戸信孝濃州岐阜ふ住して五十餘万石瀧川左近将監ハ勢州桑名長島亀山を領し三十餘万石柴田修理進勝家ハ越前北庄ふ住し百餘万石の

主さるハそもく是誰人が與へしすべく右大臣殿の御恩あらずや然るに筑前守の功をねさしと思ふ所より君父の御遺骸を安措し奉ることをしも忘却しく唯筑前守を失なはやと肺肝をくだきけるハ何ぞや蓋瀧川左近将監が隱謀ありて柴田と羽柴と相戦をしめ其弊に乗て己が欲を逞ましくせんとおもふより柴田が智慮淺く驕勇なるを見てその機をはかりその秘を發しつるを悟らずつひに身をほろぼし國をうしなふに至ること慨嘆に所あり所り都にてハ羽柴筑前守沈香を以て総見院殿大雲院殿の御像を造り奉り御送葬の

儀式をとゝのへぬへバ洛中洛外の浪人ハ云に及ばず百姓町人までもそれ〴〵に十日の糧を賜ハりて心々に念仏題目などを修行しつる振鈴のこゑ木魚のひゞき四方に滿々さり心なきものまでも鬼の如く荒に所れ所れのひし右大臣どのハ筑前守の作善によりて今ハ仏になりなふらんと思はぬ人もなかりけり是を傳へ聞く者の中に筑前守悪しと思ふものなとゝ無るへきそれらハ瀧川が許に行て筑前守ハ万事を一人して取行ひぬへども信雄信孝の両公達さくハ柴田とのさあくハ此方なと御相談をとげなそぬと云てや所るうど追従

しげるをばにもと思ふも眉睫を見得ぬ人心なれ
や一益よき便宜を得しと思ひつれハそれらを北
庄につかはしく柴田のもとへ音信しかバ柴田そ
れらを呼入れ都の事のめづらしきに何どやあり
つると問へバ元より柴田が意を取んと思ふ浪人
なり有つるをに枝葉をそへ鬼もあり角もあり
しと筑前守の都のとりなしを語りてハ宿老の柴
田どのハ何としく左ありに打こめられておはせ
しにやあど軽薄の舌を動かしそくのかせしか
バ勝家いよく怒り速に軍兵を催ふしさうちの月
らんとひしめく由を瀧川さくこハ早なれり今

うち立て何事かあるべき北國ハ雪深し十月末よ
り歩人ざふ行きなせむりのを甲冑しく弓矢を取
バ凍へくしてむなしく死んこれハ誰にが説せん
と思案しけるが他人をいく云べきに非ず自ら
往でハ叶まじと既に旅行の支度せしに忽ち風邪
の意しつかくそのびくにあすなりバ勝家必定う
ちさちあん去らバ家老を使とせん鵜殿名とく呼
れしかバ何事にかと鵜殿齋宮瀧川が前に畏まる
瀧川枕をあげくいうに齋宮一益にかくりて越前
に羅越柴田殿に對面し一益自身まかりこし中入
んと存しつるに折ふし風邪にいさみ枕も頓に

上らるゝが日數を過して詮ハなし急がさせと某に
申含めし一大事御近習拂ふて聞しめせといへバ
柴田も心得て只一人身にて差寄らん其時斯く
かくかれとことを分つゝ具に告れバ齋宮ハ心
得その座より直に出立美濃國石津安八大野の郡
を經て越前國今立郡に入バ乙女杣山の宿を過る
ころ鯖江より使をもせて瀧川が名代に鵜殿齋宮
が參りしよしをいゝせつれバ柴田方にも警衛し
て道の左右のもり沙ハ掃除せしあるしかやさて
北庄に著しかバ旅宿を點し馳走して其後勝家對
面し勝家齋宮に向ひ瀧川殿ハ御風氣とや如何な

る体ゟ心りくなし委しく談りきかせよかしと云
へバ齋宮ハ進みより風氣ハさまでのことにはあらじ
十餘日を過しなバ忽ちおこたりすべし但し一益
直に此方へ參向し御面話申さで叶はぬ用事日數
おくれて詮なし齋宮を以て述る一大事にはあらで
し御近習遠ざけられよと申ありバ勝家左右をか
へりみて用事あれバ呼出さんいづれも立さに
罷立といへバ近習の侍ども三間四間へだてゝ退
出す齋宮近々と這ひよりて羽柴殿の氣隨の擧動
風聞あらめと存ぜしに誠にゆゑたしかに承れる
二葉ゆしく剪ざれバ斧を用ゆとャあり其氣隨の

募りなバ遂に若君の御為ならしこれを制する者
柴田殿ならで誰かハ有べき早々軍を起し給ふべ
く瀧川なれども御跡につきて上洛せんとせし此節
北國のならひ雪深くして路なし此雪とけて路
のひらくを待せ給ふべしその間に筑前守へ御使
節ありて何氣なき体にもてなしたまへさなくハ筑
前油断仕り候うちに矢をそざ玉を鑄させ用意十
分に候とき俄に切て出候べくいかに筑前猛烈の
共狼狽さハがず有るべからずしからバ軍ハ勝利
とあり候ハん能々御勘考なさるべく候と詞すゞし
く言上しけれバ勝家ほく〳〵點頭て實もなく尤々と

同心し斎宮をなつく労らひ答礼の使者を進ずべ
けれども却て謀や洩れんずらん態とその儀に及
バぬよし斎宮こゝろへ給候へと返答し斎宮に
ハ三尺二寸兼高が新鑄に三國黒といふ越前立の
早馬の八寸にあまるに貝鞍置てぞ引せける此
とき筑前守より瀧川柴田両人のもとへ六七人忍
びを入て置たりしに雪ハ降り路次ハなしさに間
道をもるべく越前へ使者を立るハ何どと不審しそ
れ同隷の忍びども爰かしこへ馳ちり傳へく志
ほどに越前の國に入りこみし忍びども斎宮が著
より一日二日前に早知りてさまぐしに探りしかバ

勝家方の饗應よりしく北庄の城中のありさまをしるすべく子細にさへ正し筑前守へ注進せしかば筑前守その忍び共へ厚く褒美を出したり瀧川も柴田もかゝるべしとハ夢にも知らず計り得たりと思ひしハ口惜かりける次第なり勝家斎宮が口状をよくよく思按しけるに然なり誰が使によからんと考へ見るに玄蕃ハいからるれその上に氣みじかくて事を破らんこれハ前田又左衛門金森入道不破彦三原喜次郎に増りのあしと思ひ定め小島若狭守中村與左衛門を使者としてこの四人を呼よせ勝家對面し大息つひでゐらるゝハ筑前守が我よく

に万事を執行ふなる若君の御ため末終によからうじと存ずるこれを糺明せばやと思ひ立しが只今事を起しなば若君の御為却て災を引出すべし因て筑前と和平を結ばんと存立しが前田殿ハ筑前と舊好なり金森どのも久しく御馴染あり不破原の御二人ハ勝家無二の古々なり勝家が心腹を能々筑前に御通じ下されゆへと云ひしかば利家も金森もこの義一段の御事にて早々上洛仕らんと答へしかば勝家大に悦び和平の印とて越前綿千把塩鮎粕漬二桶を筑前守へ贈るべしとて四人に渡す四人これを請取て十月廿八日北庄を進發し

江州長濱に至り柴田伊賀守が許に立より勝家と筑前守と和平の使として寒天に旅行するよしを告しに勝豊折節所労して枕重く臥ながら此事をきゝ四人に對面のなるべけれども病中なれば許し給へ但親にても勝家など左やうに耄つらん、稍くをつさふ猿よりなほ逸もすふ筑前なり變りてにさへ筑前が召仕ふ忍びのもの五人七人は常に北り北庄にもなどか忍びを入置ざらん浅くも思ひしこが親やと片息ながらかたりければ四人は此事をきゝて弥筑前守が手の届きしを恐ろしくさては我等が此度の參向も筑前定めて知つらんなれども今はいかにせんと長濱より舟にのり湖水に棹さし大津に上り関の清水を手に結び逢坂山をこせこえて柳は緑花は紅都の春を餘所になし大宅小野勧修寺などゆけば伏見の里に伏させの雪をふりひて十一月二日といふに山城の乙訓郡山崎の宝寺へ到着しかくと案内なしけるに富田左近将監待うけて旅の労をなぐさめて馬の四足さへ心をそへ末がすへまで行とゞきけるなしぶりこれも忍びのしざなるらめ

勝家秀吉へ和平を望む事
并秀吉返答遠慮の事

羽柴筑前守秀吉ハ右近衛少将に任じ京都の守護に心を盡し禁内の御用諸公家の安堵百工町人の所置すべてかゆき所へ手の届く如くなりしかハ上下の思ひつくこと赤子の慈母を慕ふに似たり但故右大臣家一身の梟雄をたのみ本能寺の浅間なる御旅宿にて豫且の罟にかゝらせ給ふ前車の覆轍後車何ぞ戒めざらんや然しながら洛中に城郭を構へんハ恐れあり何處か然るべからんと云に山崎の宝寺にしくところハ有べからずとて宝寺を城郭となし處々に堀をほり塀逆茂木を引て筑前守移徙ありける處へ柴田勝家の使として前

田又左衛門金森入道不破彦三原喜次郎四人入来せしより富田左近将監より申出しかバ筑前守から〳〵と打わらひあふに柴田より使節とあらバこれへ請じやせとて何氣なき体して對面に及ばれける前田又左衛門ハかねてより筑前守と入魂なれバ久しく逢ねども懇意の中なり書院へ通り時節の挨拶を終り金森入道不破原か口誼終るを待つけて利家膝をすゝめ申さるゝハ故殿御事ありし後諸将心々に引分れまち〳〵のものと成行んとすそれならふも筑前殿ハ中國の探題職にて播磨に在国ましまし柴田ハ北陸道七ケ國の管領として越前

國にあれバ共際數十里をへだつ是をのづから流
言も行なハれ不思議のことを申す族も出来れども
勝家能々思案するに筑前守殿の心中故殿の御志
を續せ給ふことを主としぬへバ枝葉の言をりつく
これを疑ひ申べきにあらず勝家今ハ老さり故殿
の仰せをうけし北陸道をバいかにして切り平け
んべしその餘のことに於て筑前殿と相撲べきこと
なし此上ハ若君の御ことを勿論万事ハ筑前守殿
も勝家を今までいぶせく思召つらんなれども申す
へて和平の儀を主として昔の如く水魚の思ひを
なしあふせりに頼みたてまつる旨を落なく申せ

と勝家あつく懇に申くハ我々四人が心にも勝家
さらに偽くやハ非じと存ハ筑前守殿もとより勝
家と遺恨あるべきやうなく勝家が氣質ハ知らせ
給ふ如く骨あるも田舎人の我まゝものなり一旦ハ
筑前殿の大功を嫉し悪しと思ひつれバ清洲にて
も無礼をあらはしはあり然れ共思ひかへしく過
てりとやによりて我等を呼むかへ一向にこのこ
入くハを勿々わうく謀計にあらじとすによりて
筑前守こハ思ひもよらぬことを承るものかな秀吉
勝家の推挙により故殿に新参し勝家の武者ぶり
をまなみて度々戦場にて首尾を合せしかバ物主に

なされし時に勝家の一字を申うけて羽柴と名乗
しあり何とて勝家に對し疎意あるべきや然るに
只今和平の義を申越給ふと近ごろ迷惑の至と存
ず併ながら夫は秀吉が申條なり御使と申勝家の
口状と申秀吉が身に取て分に過たる眉目には秀
吉不和の意を存ぜずはとは年来久しきよしみにて今
ならば和平なんど申べき筋になくは幾重に
も勝家の助言により万事を執行ひ可申は若君の
とは元よりのことには御為にならぬことなれ勝家まで
もなし面々の御意見にも預り申さくは所詮若君
を早く御生長はく我々を故殿の如く御引廻し

あるやうになしまひらせ度までなり寸志には何
とて傍輩同志なくいさかひを起し申べけんや宜
しくこの旨を以て申ぬへと云へバ利家以下四人
の者ども一同に筑前守は穏しき心かなかくては
我々使に立し功も立りと悦びて即勝家が贈りし
品々を披露しければ秀吉大ひによろこび柴田殿
は昔より如是心の方にてはひしなり腹さく志さ
時は鬼の如く腹の平なる時は仏なりと人もいはれ
さし我も知る實なりけり御使に立れし面々も由
るりと御坐よせ一献参らせんと云より早く盃を
出し肴かずく引出て四人をもてなしまさ種々の

引出物なれバ四人ハ大によろこびかくの如く
筑前守殿の打とけたる上ハ勝家もさぞかし悦喜
いたさんすらん但國郡をへだて、遠路参りしたる
しるしに一筆書て御判を給ハりなべくやと利家懇
に申出れバ筑前守心とけぬれバ幾枚の誓紙を参ら
せさりとも是を破るに隙なけれバ又人質をとり
なましくも之を棄れバ詮もなし元より不平と思
はぬ秀吉が今改めて和睦せんと云ハゞ今まで不
平を抱きしに似たり和平せんと發言なりし勝家
さへ贈りおきぬ誓紙あり秀吉抽ん出て贈るべき
にあらずと云て播磨の國産飾磨の褐布千端明月

の酒二十樽を勝家へ贈り前田金森原不破へハ夫
それに音信し長途の旅行を慰めたりかくて四人
の者ハはじめの如く大津より舟にのり十七里餘
をこぎて三時ばかりに長濱へ著伊賀守に面會し
けれバ伊賀守筑前守ハ何と〳〵いひつるぞと問ふ
前田金森不破原口をそろへてかくこそいひつれ
とこそ云ひつれと云へバ勝豊眉をひそめ筑前守
もや北庄の意のうちを知つるとおぼしそれこそ
例の忍びどもの知せし所なれや四人の方々それ
とハ知らせあそん〳〵實に筑前守が打とけしと思ひ
あひしその淺々しさよといへれて何れも肝を消ケ

く前田又左衛門尉人々に向ひ何さま怪しと思ひつるハ我々山崎へ着ざるさきに夫々と旅宿を點しく有つるをバ極めて不思議と疑ひしがさてハ忍びに注進せしとおぼへたりさも有んにハ北庄へ瀧川が使を立しも定めて筑前知さるならん一つを知れバ十を知る凡人ならぬ筑前守末代に又とあるまじき弓箭取かな左ハ思さずやといへハ金森入道もそをつぎ何れにしても武運に叶ひし大将なり一定天下を切しづめ太平に致されんを遠からじとおぼへゆと首を傾ふけて語るをきゝ伊賀守胸にせきくる息を休め其もなりて左やうに思

ひゆへハ山崎のやうすを知むやと人をつかハしてゆに一人も帰り参らぬにより態々是を尋ればバ伏見の里の六地藏にとられしゆとや世にも不思ぎのことにゆと語り終れバ驛馬よしいざくせぬくと催ふされ四人の使節ハ立かへる勝家かくときくよりも謀り得たりと喜ひて四人の衆をさまぐと饗應しつゝ太刀馬の數をつくして引れバ四人ハ喜びおの〳〵居城へ急ぎ立かへる瀧川にもこの由告やりけるに左近将監眉をひそめ左様に手をうちて秀吉が承知せしこそ怪しけれさてハ此方の謀につけ筑前かへりて謀と見えたりおそ

ろしく油断ならじと一ツ益ハなかなく甲賀の忍の術
習ひおぼへしものあれバ我腹心の郎等を山崎さ
して出しけるこれも帰らん日を過し更に一人も
帰らざれバ再度人を出しさて容子をきけバ伏見な
る地蔵が化て人を取る旅の者と見るときハ若
き女に姿をかへ袖をひかへて枕をかはしなば
ほどある旅人に生てかへるを少なれバ此ごろ世
上にとりつさへ化地蔵とぞ沙汰するある怪さこと
のかぎりなり山崎にさハ淺野蜂須賀黒田木村の
老臣ども筑前守の前に出四人の使節の中條さ
一應の御評定もなく神速に御承知ありしハ如何

なる御思慮のゆへしけらん憚多きことながら我等
が心に合點せられず因て伺ひ奉ると言葉ひとし
く申けれバ筑前守ハ眼もとにうちゑみひさく
もさくも人の智慧の海の淺さ深さハ計りがたさ
さりのゝなかりけり面々も弓矢とり相應に世に
ハ勝れぬへり然るに左ほどのことを言ハるゝハ何
どぞやと云れしにより淺野黒田の二人赤面しつ
つふさ思案しけるが莞尓と笑ふて如何にも左様
の淺々しさ御事には欲といさゝか得心せし体な
りしかバ筑前守何といふぞ淺々しさハと問ける
により淺野弥兵衛障子をひらかせ今年ハ暖かにゆゑく

いまだ爰許には氣色も見えずと云ひしを聞て筑前守春は早々勢州へ出馬して瀧川をほろぼさば勝家とハ和睦したり天下ハまづ太平に近づきたりと云はれしによりて今に始めぬ筑前守の人の謀る先をこしぬる機發のほどを感じけり

重修真書太閤記八編巻之十三終

重修真書太閤記八編巻之十四

前田又左衛門尉時變を考ふる事
并長九郎左衛門尉諫言の事

前田又左衛門尉利家ハ柴田勝家のために城州山崎宝寺に使して羽柴筑前守秀吉に對面し勝家の口状を演その贈物を帰りし處秀吉一儀に及ばず承引しつるによりて神速に埒明しかば利家以下三人の面々思ひしよりも早く帰國し各々の居城に入て枕を高く眠りたるに又左衛門尉ある夜の寐覺に思ふやう我旗頭たる柴田勝家が嫉妬ふかく偏

執あるをも我犬千代の昔より能これを知る筑前守の大功ありて然も人望にかなひしを嫉むあまり清洲にても分外の無礼をなし筑前守を怒らしめ喧嘩の上にて佐久間玄蕃にこれを打殺させんと計りし事なれバいよ〱怒りと嫉みと日頃に増つるを以て大徳寺にて焼香の論に及びしに筑前守ハ厳重に備へを立三法師君の御意と云てこれを戒めしかバかへす詞もなかりしかども諸大将列座の中にて其罪を挙られしハ何ほどか腹の立けんされバこそ都の内にて闘諍に及ぶべかりしかども人数少なけれバせん方なく鞍馬越して

越前へハかへりしなれさほど遺恨ある筑前守へ和平を請しをかへす〲も不思議のことなれ定めて思慮あることならめと幾度となく考ふるにこれハ必定北國ハ雪深く十月より二三月まで人馬の往来さかんならず然るにより權に和睦を取結び筑前守に油断させその内に軍馬をとゝのへ打て出べき心ならん是しるものを我らにてさゞに思ひ得しに筑前守が容易く承引せしこそ怪しけれ然ハ筑前守勝家が胸中を悉く知りて勝家が謀に付てまづ別に工夫をこらせしならめ筑前守ハ我少年の時よりよく親しく交りしにかりそめのことにて

も心の底に落着ぬことをば如何に説とも請ひがたし
となかりしなり夫は未だ弱年の思慮も分別も定
まらぬ時の事ぞかし今は中國の探題職多くの敵
に出合て智恵も了簡も日々に新さにみがきつる
うへもや初老にも入りつれば工夫もさぞかし熟
練つらん然ば利家なども思ひ得しところを筑前
知らぬことはよもあらじ然るを念なく快くの
まゝによろこびて勝家へも使に立し我々へも物
多くおくりし心のうちは如何にぞやこれを思ひ
得ずば我筑前が上に立をかたしと云もし頭を傾
けて外さまかうさまと思ひ廻らすに断有んとも

思はれず又寝の床に夢さめて心地なしさまゞ思
ひ入りてぞ居たりしが自然と顔にあらはれて
利家が近習小性の侍ども寄合しかたりけるは殿
は山崎にて旗頭の柴田殿のやさるゝ通りに説と
のへて帰りゆきて登りに増たる引出もの多く得
あひ又北庄よりも馬に太刀その外種々の贈り物
供に立たる我々まで終にかほどの喜びは夢にも
見ざりしをあるに殿はこれを喜びあへず明ても
暮てもものの按じ済ぬ御顔の色なしさ何事なからん
とらぶほどに表勤に側遠き侍衆や番頭家の老も
さゝいてなり然ども如何と問ひよらん縁なければ

袖引しらひて黙止しけるが長九郎左衛門尉連龍かくとさくより出仕して御前へ出れバ利家も扇とり直し連龍に向ひいふに九郎左衛門尉何事なるや呼バぬに出仕ハ心ありてあしとけりし時九郎左衛門尉かしこまり不時の参上さぞかし御不審それハ例あることに候追々言上仕るべし恐れける中條には候へ共殿の御顔色常にかはりて見えさせ給ふ如何なることをか御案じあらんいさゝか御漏し候ハバ愚なる田舎意見をも申さんと申けるにより利家打わらひ色に出しと人の問まで過し上京の時ほの見そめたりし人の行衛のおぼつか

なく思ひくらしハ心の底にも恥かしやと宣へバ九郎左衛門尉戀にまよへるハ人心それも誰ゆへにけらち山雪には越ん道もなし難面かほにやおぼすらんまた問ひあぐみてやがて年たち春にもなりて木の目峠の道ひらくころを待てとの游女が心それをまことゝ誰かれ思ふ雪ハおろか火の中水の底戀にハつくす習もあれとしくバ利家莞尓と笑ひ九郎左衛門尉が心の底よくこそ心となあひしぞや去バ打とけ語るべし人にや聞られんこちこよと庭の奥なる小座敷に呼び迎へて音をひそめ其方も知ごとく柴田ハ嫉妬ふかくして横紙破る

こゝろの底誰とても知らぬものなし夫が木折に
筑前守と和睦のこと我々四人を上ましてハ柴田似
ざる心あり又筑前守ハ何事も思慮深くしてかり
そめの事をさへ再應思按の上ならでハ仮にもた
やすく決着せざりし本性なるに我等が詞の盡る
もまたず柴田殿の左もなきにいそがるゝを筑前何と
かやうに忽に納得ありしも怪しからずや是を
思ふに柴田ハ雪もへ和睦して敵の心を油断させ
んず心と志らる筑前守がそれ知らねハあるま
じきに我等がいふまゝに請引しも定めて何か深
き心あるべし然バ明年雪解し時柴田と筑前と合

戰ならんを鏡にかけて明らかなりその時我柴田と
共にせんか筑前守に付べきか筑前とハ竹馬なり
敵とならんも願はしからず柴田ハ北國筋の旗頭
なりこれを捨んも武士道ならずいかにせましと
案ずるを人すなはち知りて其方に告しならん九郎
左衛門尉が心に何とか思ふ計らひなせとありけ
るにより九郎左衛門膝をすゝめて申るハ實に
殿の仰の如く雪深きもへに和平して筑前守に油
斷させんと計りしなり但是ハ柴田殿一人の意な
らず夫々瀧川左近将監の計策ならん夫を心よく
請られし筑前守殿ハいかならん春正月下旬より二

月初ころまでに勢州へ出馬なるべし然して瀧川
を打ほろぼし夫より清洲岐阜を討平げそのうち
に雪とけ路次よくなるならバ越前へ切入なんべ
し早春筑前守伊勢尾張を攻られんに柴田殿道ふ
さがりて加勢もあるまじ是北国の押に及ばぬ筈
一の時と知るべく其ころハ此方様にても雪深けれ
バ筑前守殿へも柴田どのへも御加勢として出陣
に及びハせず其上に柴田どのハ筑前守殿と弓箭
をとりかハしあるに江州長濱の近所にてと思ハ
るべけれども筑前守殿決して長濱よりにて軍
去あるまじ九郎左衛門尉が心にも柴田勢の越前

せむ愛發ありしくれ柳が瀬なりこそよろしけれ軍
場なればいづれにも柴田勢柳が瀬をこし江州に
入て戦ハバ越前勢必勝の地と思し名すべし筑前
守殿柳が瀬をこしぬとバ越前滅亡と知せあるべ
しこれを待て御出陣ハ共おそからじと覺ゆと云
へバ利家大に悦び如何にも瀧川左近が計策ある
べしその上に柴田ハ右大臣殿の御妹として淺井
へ嫁いりなりしお市御料人をこの頃迎へ取あひ
しとありき是ハ定めて神戸殿と瀧川が媒なるらめと
思ふありと云バ九郎左衛門尉左もはべし勝家ハ
神戸殿をもり立て織田殿の御跡とし自身ハ宿老

あり叔母婿ありと云く氣隨をなさんず心のミ筑前守殿ハ織田殿の御跡残る所なく取賄ひなひつれ共真實の御心ハこれより自身日本の大將とならんとおぼしつるにやもや少將に任ぜられハ禁裏の御覺へいよ〳〵めでたく中將にすゝみ大將に上りなさんを今二三年のほどなるべし三法師どの生長ゆころハ大臣にもありなさんが其心中のさくましきを此並々の人々の及ぶ所にハあらじとかゝるにより又左衛門尉にも尤ありく祕すべしくと相談し是よりして又左衛門尉深く筑前守に心を寄くにけり

祖父物語にお市御料淺井より歸り母と一所に岐阜に居なる天下第一の美人なり羽柴筑前守深く心にかけられつれ共夫の敵とてうけひきなそれを三七殿と心をあハせ柴田これを迎へとる筑前守深く憤り柴田を越前へ返さじといそれしを丹羽と池田とこれを和しけりとあり北國全太平記に天正十一年四月廿二日羽柴筑前守秀吉直に越前の府中に押來り前田又左衛門尉に對面し早速和睦しなひ四海靜謐の功偏へに利家を頼入由を宣ひそれより北庄に押詰く城を十重廿重に取圍まる云々とあり

長九郎左衛門尉由緒の事
并長谷部信連牢を破る事

長九郎左衛門尉連龍が由緒を尋ぬるに能登の畠山の家臣八人の随一と呼れし對馬守連継の二男なり去天正五年畠山の家臣温井備中守景隆その弟三宅備後守長盛逆意を企て對馬守及びその子九郎左衛門重連を討ほろぼし國郡を押領してけりしかるに連継の二男幸恩寺と云寺の弟子として有けるが父兄の讐を報ぜんとて還俗して九郎左衛門連龍と名乗りしなりはじめ連龍信長公に卜請て天正八年越中の森山より能登の福水に打て出ヽ八伏山菱脇佛性寺小竹東番場の數城を陥れ武威を國中に振ひけるが柴田勝家加州退治のため發向しけるによりて柴田に加勢して一揆共を打ほろぼし終に温井三宅と合戦してその地を攻めとりしかバ信長公より前田又左衛門尉利家を能州の守護となし國政を取行ハせけるによりて利家の家人となりしなり其先祖を尋ぬれバ長馬新太夫為連が子左兵衛尉長谷部信連が後とかや信連高倉の宮に當参して時々伺公しけるが治承四年五月十五日宮三井寺へ落させ給ひける跡へ撿非違使ども寄せ來りしこそ宮ハ御出有りし由

をゆるにさないをせそたゞ探し奉れと云て込
入り乱妨しけるを信連こゝにあり偽ハ云ドと云ろ
て押し返へしけるを其うちされと下知につれ官
人ども切て入るを信連一人にて防ぎ戦ひ終に生
どられ六波羅に引れしが飛騨左衛門尉景家に
あづけられ左の獄に入られけり
源平盛衰記を考ふるに五月十四日の夜の明ば
の検非違使源太夫兼綱出羽判官光長博士判官
兼成高倉宮の御所に向ふと有兼綱ハ三位頼政二
男なり光長ハ美濃源氏土岐の一流なり博士判
官とハ明経博士にて検非違使の判官さるを云

ありこの三人足軽放免など大勢召つれ宮の御
所に参入る所兼綱ハ宮へも参上し御前へも出
し人々へこざと遠慮しく内へ入らず光長兼成
ハ内へ入宮に御出有べき由を申つれバ信連立
出御留守のよしを申により下臈ども走り入て
さがしまいらするに兼成が下部金武といふ放
免打刀を抜て向ひ合ふと云へり放免ハ職員令
物部丁といひしものにて打刀ハ即帯仗なるも
のなりこの金武打刀にてハかなはずとて小長
刀を以て立むかひ終に信連を生捕しなり流布
本に國見藤次犬上彦内などいふものあれども

これハ偽なり信連の召捕られしハ五月十五日の戌刻にしてその夜宮ハ三井寺へ入りたまひしに頼政入道の三井寺へ入りしハ十九日宇治合戦ハ廿六日卯刻この日宮ハ宇治より今道二里半餘のびたまひ光明山鳥居前にて薨せらると東鑑にミえたりそれより八月十七日ハ山木夜打平氏の一族兼隆を誅せられ廿三日夜寅刻ハ石橋山の合戦十月廿日ハ惟盛富士川の西の岸より迯上り十一月二日に帰京せられ十二月二日藏人頭重衡東國の追討使として下向せしも路次より帰京せられ翌年閏二月四日太政入道薨御そ

れより中一年を過し壽永二年ハ平家都落あり信連左京の獄にありて傳へ聞バ宮ハ流矢に中らせたまひ光明山の鳥居の本にて御命終らせたまひ源三位入道ハ宇治にて自殺し郎等大かた戦死しつるよしなり然らんに於てハ誰かハ宮の御跡を訪ひ宮の御子達の御後見をバなすべきいかにもしてこの獄を迯出べきと種々に工夫しけるところに囚獄の放免どもの語るを聞に信連も近きうちに切らるべき定めに入りしとやいとあはれと云ひく涙おとにもなり又ハをそりや内大臣殿をなく迄のゝしり奉りさる曲者なり相當にこそなれやと

いふもなり又老たるハいや左やうに云をあかれ
総てハ信連が道理なりと飛弾の左衛門どのハ云
れしなり今朝も左衛門殿が主の家にかし入りさ
るものならんとき誰かハ防ぐ有べき是を防が
んとせバ手疵おはせ又ハ打も殺しつべしそれハ
僻言といふ主人や有べき我々もしか振舞ふべく
ハかりへども左やうにあるべきや如何ならんと
つぶやく帰られたり然れバ死罪にハあるまじ
きりと云信連心のうちに思ふやう六波羅にて大
臣殿の方よりに無礼せられしを咎めされバ宗盛
さぞ腹立つらん腹立つればこそかやうに獄屋に

入れさるなりめ然れバ宗盛への追従に我を切ん
と云もの多かるべし此放免どもさへ多くハ切る
べしといふふくしられたり切られくそ詮方なし
然バ放免どもをさバかりく見むやと思ひつゝ夜
明られバ一人の放免をよびとゞめ信連も遠から
ず切れんと思ひ定めに夫に付て面々へ頼入にを
なり聞てとべとりへバ何事ぞもや云とりの信連
若さときより清水の観音を信じく日ごに参詣し
つるに此十餘日かゝる身になりくにへバ怠りく
に因て熱湯をいくく身を浴し最後の祈念せんと思
ふなり熱湯を一桶給ゆへそのよろこびにハ信連

が宿所に貯へたる鳥目五十貫文ありけれバ面
々へ参らせ候はんと云放免ども聞て音たかし人
もや聞んまづ其賜はるべき状かきて給へ其上
にて兎もかくも計ひ申べしと云信連さや方便謀
せしなりと心に笑を含み其状かゝんを家安くは
但し信連が身ハ禁獄せられたりまづ信連が願を
かなへてのち状をかくとも遅からじと云放免共
ばふ〳〵と云ひて熱湯をもち来り信連手をさし入
て試み猶ぬるしと云によりて又沸してもち来るを
なほぬるし〳〵と云ひて三四度に及へバ放免どもに
此方に釜をもち運び獄の前にて煮沸し湯玉の跳

るところを汲みていざ浴ゆへと云信連いかにも嬉し
この悦びには五十貫文も百貫も惜しからじいで状
かきて参らせんと云ひつゝ放免どもに硯筆紙請
ひて信連年ごろ貯へたる鵞眼五十八貫常の所
の床の下にあるべし此使に付て給はへと書て判
を書き上所ハ長谷部右兵衛殿留主処とぞ書たり
けり放免ども大に悦び始ハ五十貫とのみ聞しが今
八貫余計ありと跳りあがり〳〵喜びて右兵衛どの
心のもくろみに湯ひきぬへきりとて餘りに熱し
水もゆと云て水桶をも荷ひ来たりて信連湯
を取りかぶるよと見へしが左ハあらで並び居た

る放免どもへさつといなげしかバ煮たぎりし湯
ゆゑたまりかねいひく倒れ伏したりけるがやう〳〵
堪かねさやといひさま五七人ハ焼ただれて苦しめり
信連これを見て謀しなりといひつゝ立上
りさま湯桶のそしを蹴て獄屋の屋根へ飛あがり
それより塀を越て何處ともなく逃失たり獄屋の
庭にハ放免ども六七人焼ただらかされて苦しみ
居けるを外の放免どもせく後れて見つけたるが
傍に信連が状たり彼五十八貫を請とりに行く状
なれバ放免ども又慾心起りかれこれと評定して
暇とるうちに信連いよ〳〵遠く落ち清水坂を上り

ある谷を越し勧修寺にいたり小野大宅にいたり
しころ氣疲れ腹飢て歩行自由ならねバしバし路傍
に佇て息つぎけるが信連思ふやうかくてハかり疲
れてハ何方へか行べきなれバしバし身をやすめその
のちかけを隠すべしとおもひ付あたりを見れバ
藪のかげに草ふきたる家あり何者にもあれ立入て
食事を乞ふべしと其家にたどりつき案内をこひ
つゝあたりを見まはせバ竹垣四方に結ひまはし
草ぶきの小屋三つ四つ立ならび薪多くつみかさ
なりこれ何者の家なるや

重修真書太閤記八編巻之十四終

重修真書太閤記八編巻之十五

御坊浦右衛門由緒之事

并長九郎左衛門尉家枕食の祝儀の事

長右兵衛尉長谷部信連ハ放免どもを方便り獄屋をのがれ出清水坂より泥濘谷を越へ勧修寺にかゝり小野大宅に至りたるに飢つかれ氣力衰へしかバしばらくハ何方へか落行べき兎も角もしく腹をやしなひ力を増し然して後に又すべかりけりと工夫しあたりを見れバ民の草ぶきたる家あり是究竟とその家にたどり付案内をこひたるに主と

おぼしき男立出信連が髭みだれ髻とけて最憔悴
さる体いかさま事に逢ひし人とおぼしく見えけ
るにより深くなやしみたる顔色を見て信連やけ
るか。これハ北国の者なるが宇治川の戦場にいで
逢て持さるものを亂妨され爰やかしこと迷ひ
ありき脚氣の病さし發りまたに難澀し今暁ハ殊
に飢疲れて一歩も進みがたしかどもせめて故郷
へ一足も近くなりて死なまほしと思ひ是処までも
来りつるが今ハもや實に勞れより願くハ一飯
の御恩にあづかりたしと云主つくづくとこれを聞
又信連が顔を打まもり何さま悪き事すべきところ

とも見えずさゞ疲れおつかれし体なれそれありさ
れども今ハなさふべき飯なしといふ信連なさり
を見るに棚に高く盛たる飯一臺なり主にむかひ
なれハいかにと云主なれハとろに与ふべきもの
あらばと答ふ信連神にそなへしなれバ下しを給
仏に供せしなれバ施しぬへしといふ主いな神に備
へしにも非ず仏に供せしにもあらずなれハ死し
たる人に奠へし枕の飯なりと云信連さてハ我を
も死したる人と見なして其枕の飯さへといひて
是を取食ふ主のいはく我ハ御坊の浦右衛門と云
て死人を焼を職とするものなりその飯ハきのふ

焼つる人ふそあへしあれども人ハ是を食もせず
それゆへささゝ与へしと云ひしありといへバ信
連飯ハ何のへだてか有ん人至尊の御膳も此米ゝ
攝政関白の御飯も我々がくふ飯も同じ米なり
食ふ人ゝよりて米の品まで分るゝなれあるせよ
の態かなといひつゝ食ひ終れバ主の妻飯を炊き
そく如法ゝ仕立て信連ゝ進む信連いさく喜こび
實ゝ御恩ふて脚氣も愈へ氣力も健ふ成たり斯て
ハ我故郷へ帰り着んをいとま申し辱なしとく
立出それより大津ゝ至り志賀辛崎苗鹿堅田和迩
小松を過ぎ若狭国ふ入越前国をこへて能登国ふ

下り著きバし世を忍び居らるゝふ木曽義仲北國を
うち従へ都へ切て上りぬるときゝ馳加わり所々ふ
て高名しけれバ木曽もこれを重く用ひしあり木
曽ハ山門ふ取上り都を眼下ふ見て手くけをなせ
ハ信連ハ山科ふ向ふこの時彼御坊の恩をおもひ
出し信連今ハ一方の攻口をうけたまハり二千餘騎
の大将とありしもかの枇飯ふて疲れを養ひし故
ぞかし然バその恩の報ぜでそあるべからずと云ふ
て浦右衛門を尋るふ昔の家ふありしかバ信連立
入いかふ御坊どの過しころの喜びやさんとか路
ふ疲れし飢人が参りてゆといへど御坊ふり仰き

能々見れバまがふべくもなし御坊さまを消しげ
にも其人にておはしけり誰人にて在すならんと
思ひしに昔ハ一飯に飢し乞食人今ハ正しく歴々
の大将軍となりに變りし御有さまと見上見おろ
し不審むとき信連大なる袋を贈て主にたまふ主
たずしみあがり開きて見れバ沙金幾両かおし入
てありその時主がいふ御主の枕飯行ひなひさし立
出られしその跡へ使廳の放免大勢さづゐまさり
なくる者や来りつると云ひて探り求めけるによ
り能々尋れバ右兵衛尉信連獄を破りて逃去つと
なりや云ひて又外様へ走り行けるにより枕飯食ひ

あひしハ信連主なりけりと思ひ知りけり然バ正し
く右兵衛尉殿にてましますべし去かるに只今の
体ハ甲冑して弓箭をとり多く軍兵を率給ふ是ハ
世に沙汰する平家を滅さんとて源氏起るとき
へその源氏に付て世に出給ふとおぼえけれハ目
出たし信連主のかくまで出世し給ふを我等まで
も嬉しやなや御前と云バ妻も立出共に喜ぶを信
連見て妻にもりの取せ然御坊して世を渡り人に
いやしめられんより我に従て武士になれやとい
へバ浦右衛門大に悦び直に信連に従て京の軍に
高名しけり木曽信連が軍功を賞し能登國なる所

領を宛行ひしかバ御坊もこれに従ひて家の老となりつれ共そのまゝに御坊浦右衛門と名乗しなり源平盛衰記にハ平家滅亡の後京都に安堵せずして伯耆の國へ落下り金持の邉に経廻しけるを鎌倉殿きゝあひ當国の守護に仰せて去文治二年のころ関東へ召下されて剛の者の胤継せんとて由利の小藤太が後家に合せて召仕はれけり御恩の初に鎌倉殿御自筆にかなの御下文あてのとの國大屋の庄を珠洲の庄と号すかの所を賜はりきとなり珠洲の庄とハ能登国珠洲の郡になり

時移り代かはり能登國ハ畠山尾張守国清が分国となるにより信連が後も自然と畠山が家臣の如くなりて長の某といふ国に久しく住なれて百姓よく帰伏しつれバ結句守護の畠山より長をはつくりてなしけり信連八代の孫に長安藝守國連といひしハ今の九郎左衛門連龍の祖なり安藝守の子即對馬守なりそのころ能登七尾の城主ハ畠山修理大夫義隆といふ義隆年ごろく酒色に溺れ国政正しからず伯父の弥五郎義春と共に上杉不識菴謙信に従ひけるうち畠山の家老游佐彈正忠温井備中守畠山主計頭三人謀叛を企て上杉を叛き

織田家に降りたるが長對馬守をいぶせきものに
おもひ合戦に及び對馬守ハ討れしよりそのゝち
今の九郎左衛門連龍織田殿の幕下にてせ加をり
しを前田又左衛門尉の組とあされしより然るに
義隆病死して畠山の家終に乱れ三人のものども
七尾の城にたりて國中を政ごちたるを弥五郎義
春無念に思ひ上杉景勝の加勢を合せ一萬三千の
人數を以て七尾の城へ取かけ攻しかバ城ハ落て
三人のものも討れたり此時前田又左衛門尉父子
佐々内藏助金森五郎八一万餘の兵を率し加勢の
ため加賀国能美郡御幸塚まで到着せし所七尾落

城の由をきゝいづれも是非に及ばず引かへしけ
る時九郎左衛門かたるハ七尾落城し三人のもの
討死しぬれども上杉の人數ハ城責に疲れ勝軍
にほこり油断しぬべし早く押寄て短兵急に責
立なハヾ城を取返し可かをハ案の内にありとかせ
しか共佐々金森いづれも上杉勢ハ一萬三千然も
勝軍して氣強し味方ハ一萬とハいへ路に疲れさ
り御幸塚より七尾まで二十餘里をせて必定勝
んを又かたしといひて何れも引返しけるを九郎
左衛門さへぎりて利家をすゝめ前田一手の勢を
以て七尾に押よせ一時責にこれを責落す是偏に

九郎左衛門尉が武功によれりとて利家もいつく
しミを用ひ給ひけれバ長が家ふたゝび栄へける
に依てハかの御坊浦右衛門が子孫も重く取立ら
れ長が家老と成し年始にハ御坊が家より枕飯を
主の九郎左衛門尉に進むるを嘉例とせりとなん

大谷慶松長濱へ使節の事
并神谷木下伊賀守を諫むる事

羽柴筑前守ハ柴田が和平の使を得てしより又一
奇計を案じ出し給ひけりそれハいかにといふに
北國の道筋なれバ長濱を取返さんためにとて大
谷慶松を召出し宣ひけるハ其方かねて木下半左
衛門とハ無二の懇意なり半左衛門ハ長濱の柴田
伊賀守が家老たるのミならず内縁の叔父とさく
されバ半左衛門が得心せバ伊賀守ハそれに従ふ
べし伊賀守武勇ハ人に勝れし若者なれども思慮
浅し汝長濱にゆきて半左衛門尉にかく〳〵云とぞ
下知し給ふ間に聰れたる大谷慶松承りぬと答
して即時に用意し長濱に来りまづ徳永石見守が
家に案内す石見守元より慶松とハ懇志を通じく
談に間あり折節徳永が家に柴田が與力大鐘藤八
疋田左近も来會せり此二人慶松とハ竹馬の友な
り不思議の面會を悦びその夜ハ夜と共に談らひ

なり徳永大谷にいふ様敵となり味方となるこの
ころの有様なり今日は如斯親しみかさらへども
明日はいかに成行べきぞ定めなきは武士の身
のうへなりさらば今宵は實に得がたき圓居なり
一献酌んと云つゝ家の老を呼び出し大谷どのゝ
来りのふに鯰を煮て酒を進めむやと思ふなり共
用意せよと云へバ畏りぬと答て立になりさて徳
永いひけるハ柴田修理殿より使者を以て和平の
義を筑前守殿へ申入れよといひしに筑前守殿御得
心のよし使者の衆よりうたゝみそりは四聴に達せ
し筑前どのゝ心中を知せみえぬことを

よもならじ知て和平の義を請けれひしかへつて
深きこゝろの有しなるべし其深き心といふは此
ころの雪の深きを便としてまづ此長濱を攻取ん
となしたふなるらん然る時は只今もいひし敵とな
り味方となるとは此をよ其時となりバ如此うち
とけかたらえん暇もなるまじ然バ今宵の酒盛は
實に千秋の一會といふべしと云その時慶松はひ
なるは如何にも御邊の御心付の通り筑前守の和
平を承知しつるは必定深き心のなるなるらんと我
々も心付しが長濱攻はいよいよなるまじまづ考が
へて御覧ゆへ長濱へ軍兵をさし向ゆへど修理殿

ハ雪深きが故に出張たるまじく〱へども瀧川を
よび三七殿よそに見てハ居めぐまし三七殿と瀧
川と一つになりて援ひ来りなハゞ筑前いかに猛
くけ共長濱をも取得ざるのみならず柴田どのと
敵となり忽ちに三方のかこみを設くべし筑前決
して左やうの思慮なき軍をなすべからずと云に
より石見守然れバ何由へに和平を請しならめと
思案するを見て慶松又すゝみ今宵ハ乱世をわ
すれての一會なりさやうのことを云べきにあらず
只うちとけ思ひ〱にたのしみてましと云ハ大鐘
疋田も一同に然るべしそれに就くハ半左衛門を

も呼ぶべきなりと云石見守實に左なりとて云
て木下をよびむかへられ半左衛門使と共に出来
り慶松を見て一別以来の疎遠をかこちあまり餘念
なく酒坏とりかハし數もかさなれハさま〲思ひ
をのべて世にむつまじく語りける此事いかにし
てか伊賀守の耳に入りけり伊賀守ハ所労とて病
牀にありしが筑前守とハもとより親しき交わり
大谷慶松をも見知りされバいたく病に侵されも
の六かしきによその有さまを聞たらんにハ少
し病の怠るたよりやならんその大谷よべと
いはれしかバ使德永が家に来り伊賀守のいはれ

しきりを告げけるにより大谷もしぶ〳〵に伊賀守殿へまかり出んとありけれバその用意もすべかりけるがふと舊交を思ひ出しゝこゝまで参向しつるなれハなまりに無礼くしくてといふを以て使をたちかへりそのよしを申しけるに伊賀守いや左にあらずこの方も病中なり内々にて對面たまはらんといふにより慶松一人使と共に伊賀守が病牀にいより何くれと世の有さまをかたり時を移して退出し又石見守半左衛門と額をさし寄せての語りしく日を暮しけるが伊賀守も慶松がはなしに力をえしいさゝか心地よくおぼへしかバふさくび

よびむかへて物がたりし夜をふかしなどしけるが月とに北庄より付置し横目ども大に不審しいそぎ雪中をものせず越前へ立かへり北庄にいたり修理にかくと告けれバ元より思慮浅き勝家なりこれハいか伊賀守と筑前守と密々に語らふておもひしかバ与力の者の心を引見てそののち計らふ旨あるべしと決断し山路将監神谷越中守ハかの参會の列なりしバこれらと示し合すべしとて近習をひそかに長濱につかハし大谷が体をうかゞハせけるに大谷何となく逗留し夜に入れバ木下半左衛門徳永石見守大鐘藤八足田左近とうちよりて

深更までも酒のみ遊びける体只事ならずと見え
つるのみならず夜半ばかりに伊賀守の許へ入て
只二人さし向ひ密々と談ふハさだめて餘事なら
ずと横目も近習も推量し種々と考ふれバなせし
ことのみ多かりけるによりその由すべて落なく
北の庄へ注進しけるによりて山路将監ひそかに神
谷にかたりけるハ大谷慶松長濱に来り滞留すで
に十餘日に及ぶ筑前守の使かと思へバ左にもあ
らずこの穏しからぬ世のなかに長々と遊び居る
ものやあるべきいかにも不審に思ひ候貴殿ハ左
ハおぼさんぢやといふ神谷答ていふやう某も兼て

さやうに存じつるにより木下半左衛門にやゝ早
々慶松立返り候やう計らひ申べしと申候へバ
半左衛門が申やういや苦しからじ大谷ハ我らと
内縁ありかつ慶松が母の頼みに因てこの濱にて
尺二寸の鮒を得まほしとて来れるなりその鮒さ
へ得させなバ直にかへるべし但尺二寸の鮒ハ此
雪中に得がたしされども日數を經ぬるなりといふ
将監ハせしみ偖ハ半左衛門も慶松と一味と思ハ
れけり神谷にもかたりて大谷を驚かさぞやと思ひ
立まづ神谷が館に行て大谷がいかにも伊賀守
殿の御為によろしからじと存じ候により半左衛

門に申て候へバ躰をも得んとて逗留のよしを申ス
然バ大谷が宿として候家の後より鉄砲うちかけ
驚かしてんと存立候一人にて仕候べけれ共後日
に上より御沙汰の候ひし時御心得候て給候へと
申す神谷聞ていかにも将監殿我らハ伊賀守殿の与
力なり主従の縁が候はず伊賀守殿の打て出なそ
んとき手を合せ候へバ事ハすむなり伊賀守殿大
谷にむかられて筑前守へ一味と申をたしかに知れ
候ハド打揃て北庄へ罷越そのよし申候ハド与力
と与頭との理ハ立可申候その証跡もなきに事々
しく申立候とハ与力の入らざることゝおぼへ候大

谷が逗留ハ城主の伊賀守殿の心にはなるべし我ら
があづかりしをにはらんとの候へハ将監もうち
うなづきて立かへる、時神谷がいふやう夫ハさて
おき筑前守と修理進殿と始終和平ハ整ふまじ必
定明春雪とけ北国の道開にならんときに何れよ
りか軍を起すならんされども筑前守ハ幼稚なが
ら主君の御跡をさしかに定めつれバ筑前に向て
軍せんハ三法師君を敵とするにて尤考ふべし修
理進殿ハ三七殿を取立てと思はるべけれども神
戸の家継し三七殿なりそれを織田家の遺跡に立
んといはるゝハ理以のほかにさかへり此よくに

軍せバかならず柴田ハまけとなるべしされくハ修理殿の組とハいへ主従にてハなしよそに見るとも誰かハ〱しと云べけんやされ共正しく組頭の柴田殿の家の亡びんとするを不知顔に見るべきにあらず去れとも修理殿ハこれらいふことをきくべき人にあらし何卒して伊賀殿を筑前守に引分て修理殿亡びぬるとも伊賀殿を世に出して柴田の家の系嗣を継せむやと思ひゆあり将監殿ハ何と思ひめふにやと問バ将監いかさよ筑前守と修理進殿と程なく合戦に及ぶべしその時我らハ先手にてせ加わりて討死すべくぞんじゅ

それより外に思ひ寄りもなくにと答ふれハそれも去ることにへ共伊賀守殿の此日ごろ厚く見なしなふを何とて情なくハなしなふべきとのへバ将監我らごとき愚人の了見にハ父の修理殿亡びバぬひて子の伊賀殿の全かるべき道理を知ずと云バ神谷されバそのことを我らハかねて思ふにより大谷とも中違なすと存ゆなりといふを聞て将監ハいよく何もく大谷と共に筑前守へ内通するよとを推量し只一人北庄へ使を立て長濱を立去んことをそかりしなり

重修真書太閤記八編巻之十五終